

日本のアーカイブズにおける
マイクロ資料の保存
— 質問紙調査及び
図書館との比較から —
東京大学経済学部資料室

本ポスター展示は、当室のメンバーが共同研究で行ったマイクロ資料（マイクロフィルム・マイクロフィッシュ）の保存に関する質問紙調査の成果であり、JSPS 基盤研究(B) 課題番号15H02786「『図書館資料保存論』に関する基礎的研究」に関連する、図書館とその類縁機関である文書館（アーカイブズ）との比較作業の一環である。先行研究である田中康雄の質問紙調査（『文書館における資料保存とマイクロフィルム』国立国会図書館編『資料保存とメディアの変換－第4回資料保存シンポジウム講演集－』日本図書館協会、1994年）から20年を経た現状の報告でもある。

調査（分析）対象は、公文書館75館（国立公文書館ウェブサイトに掲載、以下公と略す）及び大学文書館88館（全国大学史資料協議会加盟館、以下大と略す）の163館であり、2014年7月から10月にかけて質問紙調査（ウェブ併用）を行った。回答数は公57・大47の104館（うち予備調査2館）、回答率は63.8%である。以下その結果を簡単に述べる。

1) マイクロ資料の所蔵状況は、所蔵ありが公44館（77.2%）、大29館（61.7%）であり（これが以下の母数となる）、公の45.5%が定期的に受け入れているが、大の75.9%は現在受け入れがない。所蔵資料のマイクロ化は、公54.5%、大13.8%であり、長期保存の手段としてマイクロ化を行っている（デジタル化併用を含む）のも、公79.5%、大37.9%と差がみられる。

2) マイクロ資料の保存管理について、保存場所として専用の部屋があるのは、公43.2%

に対し大は0%である。空調及び温湿度管理に関しては、24時間空調が公59.1%、大55.2%であり、湿度設定が可能なのは、公61.4%に対し、大は31.0%にとどまる。

3) フィルムの種類と取り扱いについて、公の52.3%、大の58.6%はネガ・ポジの区別をしていない。ビネガーシンドロームの原因となるTACと長期保存に適しているPETというベース（支持体）の区別に関しても、公の56.8%、大の41.4%が区別をしていない。

4) 運用については、担当者が存在するのは公65.9%、大17.2%と差がみられる。

5) フィルムの劣化について、ビネガーシンドロームは両者とも5～6割発生しているが、その対策に関しては、公の巻き直し（47.7%）、包材交換（43.2%）に対し、大では空調導入が34.5%と異なっており、特にないも41.4%にのぼり、対応方法に異なる傾向がみられる。

以上の結果から、文書館の半数がマイクロ資料を所蔵し、6割が長期保存媒体と位置付けるが、24時間空調は全体の5割、湿度設定は公6割、大3割など、公と大で異なる傾向があることが判明した。図書館との比較では、文書館・図書館の両者とも、フィルムの種類による取り扱いの区別はあまりなく、ビネガーシンドローム対策として重要な湿度管理など根本的な環境対策が進んでいないと評価しうる。

なお図書館における質問紙調査については、小島浩之編著『JLA 図書館実践シリーズ 27 図書館資料としてのマイクロフィルム入門』（日本図書館協会、2015年）があり、こちらも参照されたい。（富善一敏）